

植田暁

様式 1

- (1) ロシア モスクワ ロモノーソフ記念モスクワ国立大学 国際教育センター
- (2) 派遣期間 出発日 2011年7月22日、帰国日 2011年8月22日、総日数 32日
- (3) 研修スケジュール
2011年7月25日～2011年8月21日 96時限
2011年7月29日 エクスカーション (ノヴォデヴィチ修道院等)
2011年8月5日 エクスカーション (コローメンスコエ歴史地区等)
2011年8月12日 エクスカーション (プーシキンの家博物館、救世主キリスト聖堂等)
2011年8月19日 エクスカーション (トレチャコフ美術館等)

様式 2-1

(1) 当初の計画の概要

派遣者のテーマ「ソビエト政権初期フェルガナ地方の社会経済史研究」の研究を進め、ロシア及び中央アジアの研究者と自らの研究テーマに関して討論することが可能なロシア語能力を身に付けることを目指す。中央アジア現地でのオーラルヒストリー、聞き取り調査のためにもロシア語能力向上が必須であり、中央アジア史の一次史料、研究文献の読解にはロシア語が不可欠であることは言うまでもない。また、ロシアの社会と習慣を実体験することによって、自らのロシア帝国やソ連理解において文献だけでは得られない視点を得たい。

(2) 実際に達成された成果

モスクワ大学ロモノーソフ記念モスクワ国立大学 国際教育センターにおいて一か月のロシア語の研修を受講した。文章読解能力はもとより、ロシア語の発音、聞き取り、会話能力の訓練を集中的に受けることができ、大変有意義であった。適切な量の課題が出され帰寮後に予習復習によって学習を定着することができたと考える。

また週末にはモスクワ近郊の名所旧跡を中心にエクスカーションのプログラムが生まれ、4回のエクスカーションに参加した。中世からソ連期にまで至るモスクワの重層的な歴史を肌で感じ取ることができたと考えている。

授業後および休日を利用して多くのモスクワの書店と古書店を巡ることができた。最新の研究書及び私の研究テーマに貴重な情報を提供してくれるソ連期の研究書などを購入することができた。帰国後モスクワで入手した資料の分析を進めている。

(3) 感想

私にとって初のロシア行であったが、手続きを含めてトラブルなく派遣を終えられたことに次世代人文社会学育成プログラムを担当して下さった先生方及び受け入れのモスクワ大学の先生方と両大学の事務の方々に大変感謝している。一か月間という短期間ではあったが、食事、交通、買い物などを行い

ながらモスクワで生活できたことは貴重な経験であったと考えている。農業と遊牧の間の関係を研究している私にとっては、盛夏から秋に入りかけようとする内陸の都モスクワでの見聞は特別な意味を有していた。東アジアとは全く異なる気候と植生を実見したことによってモスクワに対する印象の一部が変わった。特にその緑の多さとモスクワ川に抱かれた特徴的な地形は印象的であった。かつてモンゴル帝国の支配が及んでいた内陸ユーラシアの端であり、ナポレオン戦争と大祖国戦争の古戦場である古都を歩くことができたことに歴史学徒として深い感慨を感じた。特にモスクワの随所に残る大祖国戦争の記念碑の数々は今でも都市の中で存在感を保っており、英雄都市のアイデンティティーとソ連期の英雄顕彰の連続性を感じた。一方でソ連期との断絶をもっとも感じたのはロシア正教の復興であった。救世主キリスト聖堂の再建が有名であるが、ノヴォデヴィチ修道院においてもソ連期の正教の受難とソ連崩壊後の急速な再編成を宣伝する展示が行われ、ソ連期のニュース映画を利用して当時の正教への迫害を強調していた。各地の教会には海外からの観光客と並んで正教の信徒の人々の姿も多かった。旧ソ連各地で進行している宗教の復権の潮流の一つに位置付けられるのだろう。